マルサスの人口理論

南　亮三郎

一、マルサス人口理論の生成と本體

マルサスの人口理論は、二つの意味で論爭の產物である。それは先づ、當時焦眉の思想問題たりし社會完全化說を繞つての、彼れの父との討論に、その直接の端を發した。父ダニエルは此の新思想を辯護し、子ロバアトはこれを攻擊した。その所產こそ、一七九八年（序文日附六月七日）ロンドンに於て、最初は匿名で發表せられたるマルサスの『人口原理論』[1]に外ならない。匿名の著者は、その父を「一友人」と假稱して、自身で語る、

「本論文は、ゴドウィン氏の『研究者』中に於ける貪慾と濫費論に關しての、一友人との會話に、その端を發する。この討論は、社會將來の改善に就いての一般問題に始まつた。そして著者は最初、その友人に自分の思想を、會話でするよりもより明瞭に行ひ得るだらうとの考へから、ほんの、紙上に述べてみる積りで、座に着いたのである。然るに、問題が著者に明かになるにつれて、彼れが今まで出會はうとも思はなかつた若干の考へが浮んで來た。そして著者は、かくも一般に興味あ

1) *An Essay on the Principle of Population, as it affects the future improvement of society. With remarks on the speculations of Mr. Godwin, M. Condorcet, and other writers.* London 1798 (anonymous).

る論題に就いての、どんな、ささやかな光りでも、公平に受け容れられるに違ひないと思ふたので、公刊する形でその思想を叙べようと決するに至つた。[1]」

次に第二に、マルサスの人口理論は、彼れの同時代人との熱心なる不斷の論爭を通して成長して行つた。「社會將來の改善に就いての一般問題」に關する、その「一友人」との、その父との、討論に端を發した『人口原理論』は、其儘に又、ゴドウィン、コンドルセー等々の完全化論者に向けられたる論爭文であつた。爐邊の談論に於て父を破つた——但し吾々はその爲めに父が改宗したとは聞いてゐない[2]——マルサスは、論壇に向つては、これ等の完全化論者に刄を擬したのである。それより四年を隔てた一八〇三年には、彼れ自から「新著と見做し得べし[3]」とする增訂新版（第二版）が出で、一八二六年までに版を重ねること六回、內容字數に於ては、その初版に比し實に五倍の增加を示す大著にまで成長した。この論著の成長は、同時に彼れの理論の成長でもあつた。そして理論の成長は、主として彼れの、同時代人との論爭に負ふのである。

かく云ふとき私は、無論、第二版及びそれ以後の版本が論爭文たる形態と性質とを捨て去つたといふ外見上の事實、並びに通行の解釋を無視するのではない。「一八〇三年にはマルサスはもはや、ゴドウィンやコンドルセーを論駁してはゐなかつた。彼れは眞實に人口に就いて論述しつゝあつた」「マルサスは聰明なる論爭家たることを止めた。彼れはむしろ、人口問題そのものに興味をもつ經濟學者の役割を選んだ」「第一版の議論は人間完全化の思辯に對して向けられてゐた。第二版は、貧民の狀態と、彼等の困憊を救ふ可能性

1) *An Essay*, 1 st ed. preface p. i.
2) Cf. Memoir of Robert Malthus (by Otter), p. 38 in: Malthus, *Principles of Political Economy*, 2 nd posthumous ed. London 1836.
3) *An Essay on the Principle of Population; or, a view of its past and present effects on human happiness; with an inquiry into our prospects respecting the future removal or mitigation of the evils which it occasions.* A new edition, very much enlarged. By T. R. Malthus. London 1803. Preface, p. v.

とに、その注意を向きかへてゐる、」(フィールド)。この事實を端的に表明すべく、『人口原理論』がその副題を第二版に於て變化したのも、知られた事柄である。形態の上から、及び又內容の上から、『人口原理論』は確かに、單なる論戰文たることから自からを止揚した。同時にマルサスは、若き熱情の評論家たることより、冷靜なる實踐的研究者へと、自からを高めた。かくて、ケインズをして語らしむれば、第一版は、「一方では完全化論者の反駁に、而して他方では、その反對の外觀にも拘らず、造物主の方法の辯護に、係はつたる先驗的著作」であつたに反し、「後版に於ては、政治哲學が政治經濟學に道を讓り、社會史上に於ける一開拓者の歸納的證明に據つて普遍的原理が敷かれてゐる、」[2]のである。

併しながら、人は、この論著の成長と態度の高揚とには、彼れの同時代人との論爭が、彼れの批評家達の批評が、不斷の役目を演じたことを見逃してはならない。マルサスが、『人口原理論』を繞つて、彼れの批評家達と、特に最初の而して終生の論敵たるゴドウィンと、如何なる論爭を終始したかは、別の筆者がこれを明かにするであらうが、彼れが自から第二版の序文に於て、「原理上、第一版から異なるに至つた」[3]と云へるもの、即ちかの「道德的抑制」の導入も、當の論敵ゴドウィンの示唆[4]に負ふこと略ぼ誤まりなく推し得る所であるし、後版に於ける些細なる辭句の、或は又大いなる章句の添削にすら、注意深き且つ鋭敏なる讀者は今猶ほ、十重二十重にマルサスを包み圍みし批評家群の咆哮を、偲び聽くことが出來るであらう。

「こゝに提出せる主要原理は異論の餘地がない。從つて、若しも私が單に概觀を叙べるに止まつてゐたならば、私は難

1) J. A. Field, *Essays on Population and other Papers*, ed. by H. F. Hohman, Chicago 1931, pp. 262, 263, and 265.
2) J. M. Keynes, *Essays in Biography*, London 1933, p. 117.
3) Malthus, *An Essay*, 2nd ed. preface, p. vii.
4) See Malthus's letter to Godwin reprinted in Kegan Paul's *William Godwin*, London 1876, vol. i, p. 323; and cf. W. Godwin's *Thoughts occasioned by the Perusal of Dr. Parr's Spital Sermon, etc.* London 1801, p. 76.

攻不落の要砦に身を固め得たてあらうし、この形に於ける本書は遙かに手際よき風威を裝ほひ得たてもあらう。だが併し、かゝる概觀は、たとへ抽象的眞理の原因を提出し得はしても、何等か實際的な善を促進することは滅多にない。そして私は考へた、若しも私が、本問題より必らず發出すると思はれる諸歸結――これ等の歸結が何であらうと――の何れかを考察することを拒否したとすれば、私は本問題を正當に取扱ふて公平なる討論下に拉し來たる所以とはならないと。けれども、此の計畫を遂行することによつて私は、多くの反對論に、そして恐らくは、遙かに痛烈なる批判に、一門戸を開いたことを知つてゐる。併し私は、私が陷りでもすべき錯誤でさへが、論議への把手と、驗證への彌や增せる刺戟とを供することによつて、社會の幸福とかくも密接に結合せる一問題により以上の一般的注意を喚起せんとする重要目的に、役立ち得んことを想ふて自から慰めたい。[1]」

一つの論策 an essay にあらずして今や一つの學術論文 a treatise であると稱せらるゝ第二版、從つて又それ以降の版本でさへが、些かも搖ぎなきマルサスの論爭的心構へを傳へ藏せること、右一文の示すが如くである。マルサスの『人口原理論』は、從つて彼れの人口理論は、かゝる事實上の、及び心意上の論爭を通して成長して行つた。洵にボオナアの云へる如く、「彼れは一書を書きつ放しにして、彼れの死後、世人がそれに就いて爭論するに委ね置いたのではない。彼れは世人を自分の伴侶とし、そして、あらゆる討議を自著の改良の資料たらしめたのである。これが人口原理論に、經濟學上の諸著作の間にあつての、獨自の地位を賦與する。[3]」所以である。

意圖する直接の主題を傍らに眺め乍ら、私は以上、餘りにもくどく、論爭書としての『人口原理論』の生成

1) Malthus, *An Essay*, 2nd ed. preface, p. vi; 6th ed. vol. i. preface, p. vii.
2) Bonar's Notes on *Malthus's First Essay*, London 1926, p. i.
3) Bonar, *Malthus and His Work*, 2nd ed. London 1924, p. 50.

を語つたかも知れない。けれどもこれは、マルサスの人口理論とは何か、マルサス人口理論の本體は何處にあるか、を詮索究明せんとする本文に缺くことの出來ない前置であつた。事實、マルサスの人口理論は、『人口原理論』の成長と共に成長して行つた、從つて、彼れの理論の核心を探り索めるの作業は、かゝる『原理論』の生成を顧慮してのみ充全に果され得ると私は思ふのである。

そこで私は改めて問題を立てる。マルサス人口理論の本體は何であるか？

然か問ふ場合私は一應、前段に於て所々それを使ひ分けて來たやうに、マルサスの『人口原理論』と其の中に含有せらるゝ彼れの人口理論とを區別してゐる。『人口原理論』は、その第一版の形に於ては「人口原理が社會將來の改善に及ぼす影響、並びにゴドウィン氏・コンドルセー氏・其他論者の思辯に關する評論」[1]であり、その第二版以下の形に於ては「人口原理が過去及び現在に亘り人類の幸福に及ぼせる諸作用の觀察、並びに、此の原理より生ずる諸惡の、將來に於ける除去乃至は緩和に關する豫測の研究」[2]である。何れも「人口の原理」を「論」じてはゐるが、その「原理」の何であるかは未だ第一版の形に於ては充分に明かではない。其處では彼れは寧ろ、「人口の原理」を殆んど自明のものとして論敵に對ひ擬した。從つて吾々は、——彼れの人口理論は此の「人口原理」を旋回中心とするものであるから——第一版に於ては無論、理論の體系化的試みに接することは出來ない。『人口原理論』は變りなく其處に在つた、併し「原理」自體の究明、理論そのものゝ展開は、未だ其處に見出すを得ないのである。「元々彼れは人口原理を、唯單に、完全化に就いての彼れの父との

1) Subtitle of the first edition of Malthus's *Essay*.
2) Subtitle of the 2nd and following editions.

討論に於ける一武器として、使用したに過ぎない。今や（第二版に於て——引用者）彼れはそれを、それ自身のために研究した[1]、」のである。併し吾々は同時に、全版本を通じて、注意せねばならない。——「マルサスの人口論文は、人口問題を自己目的として凡ゆる側面から照明しようとした概論書ではない。照明の對象は、むしろ、人口問題ではなくて社會問題であり、その照明の手段が『人口の原理』であつた。この原理に據つて、社會問題は、その解決の可能性に向つて探究せられたのである、」（ブッヂエ[2]）。それ故にこそ吾々は、マルサス人口理論の本體を詮索するに方つては、一方では『人口原理論』の成長に、而して他方では此の論著の非概論的性質に顧慮して、少くとも第一版と最終の第六版とを比較しつゝ、理論構成へのより本質的なるものを篩ひ別くるの作業を行はねばならない。

マルサスは時に「全く不明晰な著作家[3]」と評せられる。事實、如上の作業を行ふに方つて、吾々も亦、略ぼ相似たる印象を感得する。何が「人口の原理」であるか、何が彼れの理論の本體であるか、それは然かく容易に答へ得ない問題なのである。その責の多くは、右に述べた如き論著そのものゝ成長事情と性質とに歸するであらう、だが併し、責の歸屬はどうであつても、後代人による正しき解說の困難は變りなく此の論著に附き纏ふのである。それ故に、すでに古びた引用ではあるが、次の如くに云へるキャナンの述懷は尙ほ後至者の多くを唱和せしむるに違ひない。曰く、「若しも直截に、マルサスによつて理解された人口の原理とは何か、何がマルサスの人口理論であるか、と問はれたならば、最も堅實なる經濟學者は躊躇するであらう、……[4]」と。

1) E. Cannan, *A History of the Theories of Production and Distribution*, 3rd ed. London 1917, p. 133.
2) S. Budge, *Das Malthus'sche Bevölkerungsgesetz und die theoretische Nationalökonomie der letzten Jahrzehnte*, Karlsruhe 1912, S. 6.
3) P. Mombert, *Bevölkerungslehre*, Jena 1929, S. 170.
4) Cannan, *Theories of Production and Distribution*, 3rd ed. p. 134.

本篇は即ち、「何がマルサスの人口理論であるか」に答へることに依つて、敢へて自から「最も堅實なる經濟學者」たらんことを破棄せんとする試みに外ならない。

二、並び存する後至者達の諸解釋

さて先づマルサスは、その『人口原理論』最終第六版の本文冒頭に於て曰ふ、

「……本論文の主目的は、人間の本性そのものに緊密に結び附けろ一大原因の諸作用を檢討するにある。而して此の一大原因たるや、社會の創始以來、不斷且つ强力に作用しつゝあつたにも拘らず、本問題を取扱へる著作家達によつて殆んど注意されなかつたものである。……

「私の謂ふ原因とは、供せらるゝ榮養以上に增加せんとする、全生物界を通じての不斷の傾向 (the constant tendency in all animated life to increase beyond the nourishment prepared for it) これである。[1]」

そして、かの有名なる三つの命題 "propositions" は、第一編第二章の、及び後に再び、若干の辭句を變へて第二編第十三章の、夫々の末尾に現はれて來る。[2] 即ち、

「一、人口は必らず生存資料に依つて制限せらる。(Population is necessarily limited by the means of subsistence.)

二、人口は、或る甚だ强力且つ顯著なる妨げに依つて防止せられざる限り、生存資料の增す所では必らず增加する。(Population invariably increases where the means of subsistence increase, unless prevented by some very powerful and obvious checks.)

三、是等の妨げ、並びに、人口の優勢なる力を抑壓して生存資料の水準に保たしむるの諸妨げは、すべて道德的抑制、惡德

1) Malthus, *An Essay*, 6th ed. London 1826, vol. i. pp. 1—2 (side-dots of Minami).

2) *An Essay*, 6th ed. vol. i. pp. 23—24; again in pp. 533—534 (slightly altered).

及び窮困に歸する。(These checks, and the checks which repress the superior power of population, and keep its effects on a level with the means of subsistence, are all resolvable into moral restraint, vice and misery.)

こゝからして、後至者達の解釋は大樣二つの類型に別れ立つ。各々、その代表的な二三のものを擧示するならば——

(A類) ボルトキーヴィッツはいふ、「マルサス理論の頂點には、人口は增加する傾向を具有してゐる、といふ主張が立つてゐる。[1]」

ブッヂエは、前節に引用せる一句、即ちマルサスの人口論文は直接に人口問題を照明の對象とせず、實は社會問題を對象としたのであり、そして其の照明の手段が「人口原理」であつた、云々の一句に次いで曰く、「この事からして、併し又、マルサス人口原理は本來何處に頂點を附してゐるか、マルサス人口法則とは本來何を指すべきものであるか、といふ問題への回答も與へられる。それは、かういふことにならう。すべての人間を滿足さすやうな、社會問題の一解決を、今まで妨げて來、今尙ほ妨げて居り、そしてマルサスの見解では將來も依然として妨げるであらう事實こそは、『人口は、存在する生存資料以上に增加せんとする傾向を有する』といふことに外ならない。此の法則の構成部分と見做されてゐた總ての他の諸命題は、この法則の前提たるか、さもなくんば歸結である。[2]」

ネーベルンクはいふ、「マルサスの人口原理は、人口はその生存資料以上に增加せんとする傾向を有すると

1) L. v. Bortkiewicz, Die Bevölkerungstheorie, S. 1: in *Schmollers Festgabe*, 1. Teil, Leipzig 1908.

2) Budge, *Das Malthus'sche Bevölkerungsgesetz*, 1912, S. 6.

いふ命題に、頂點を有する。」又曰く、「人は謂ゆる三つの命題に人口法則の內容を見ようとした。併しそれ等は、上位に在る原理よりする諸歸結の一要約たるものに外ならない。[1]」

（B類）フェッターはいふた、「序論的章に於ける最肝要なるものと普通に見られてゐる定式は、一、『人口は生存資料以上に增加せんとする不斷の傾向を有する』といふこと、而して別の言葉で云へば、二、生存資料は『算術級數に於けるよりもより急速には增加され得ない』に反し、『人口は妨げなければ幾何級數的に增加する。』といふことである。……原文では特筆せられてはゐないが、私の考へでは、右の定式よりも更に重要なる章句は、マルサスによつて定式的に第二章の末尾で樹立せられた三命題である、云々。[2]」

モムベルトも亦、夙に、同樣の見解を表明してゐた。彼れの最初の人口論的著作たる『ドイツに於ける人口運動の研究』には、明かに、「次の三命題が、周知の如く（？）、マルサス人口論の核心を成してゐる、[3]」と述べてゐる。但し此の人の解釋は、其後の諸論著に於て種々の變化を見せてゐる。例へば『社會經濟學大綱』中の一文に於ては、マルサス理論の「核心は、生存資料が限定せられてゐることの爲に、人口の不斷の增殖にも亦、殆んど踏破し得ざる限界が劃せられる、といふにあつた、[4]」と說き、先頃の主著『人口論』に於ては、「マルサスはフランクリンと共に次の事實から、即ち總ての生物には、そのものゝ爲に備へられたる生活資料以上に增加せんとする傾向がある、といふ事實から出發する。これは根本的に人間に

1) H. Nebelung, *Die Malthus'sche Bevölkerungslehre. Versuch einer Interpretation*, Diss., Giessen 1930, S. 17 und 45.

2) F. Fetter, *Versuch einer Bevölkerungslehre ausgehend von einer Kritik des Malthus'schen Bevölkerungsprincips*, Jena 1894, S. 4.

3) P. Mombert, *Studien zur Bevölkerungsbewegung in Deutschland usw.*, Karlsruhe 1907, S. 267.

4) Mombert, Wirtschaft und Bevölkerung. I. Bevölkerungslehre, im *Grundriss der Sozialökonomik*, II. Abt. I. Teil, Tübingen 1923, S. 60.

も當てはまる。從つて又、マルサスは彼れの著作の中心點に、人口は生活資料の量以上に增加せんとする不斷の傾向を有する、といふ命題を置いたのである。彼れの學說の此の中心點から次の三命題が現はれる、云々[1]」と述べてゐる。こゝまで來ると、モムベルトの解釋は、往年のそれと正反對になる。彼れは今やA類へと自からを轉化せしめた。併し、然うかと思ふと、此の同じ書物の結論編では彼れは次の如くに書くのである、「彼れ（マルサス）の學說の核心は、周知の如く（！）、人口は生存資料よりもより急速に增加する傾向を有するといふこと、人口は此の場合常に現存の食物範圍を壓迫し、そしてそれを超えて增加せんとする努力に際しては、常に又、阻止的な諸妨げに依つて食物範圍の水準にまで引き押へられるといふこと、から成立つてゐた[2]。」――但し私は、マルサスを "ein recht unklarer Schriftsteller" と評し去つた我がモムベルト教授に、此の同じ評言を聯想することだけは愼しみたい。

以上二類の解釋は、歸する所、本節の初めに揭げたるマルサスの二聯の定式化的立言の中何れを重しとするか、即ち、全生物界を貫通したる、從つて人類の、不斷の增殖傾向にマルサス理論の本體を見るか、若くは又、人類は謂ゆる三種の妨げに依つて常に必らず生存資料の水準下に抑止せられ、これ等の妨げなき場合にのみ人類の增殖は常に生存資料の增加に隨伴する、といふことを定式化せるかの三命題に其の本體を見るか、の相違から相別れるのである。併し、異なる解釋はこれら二類に盡くる譯ではない。マルサスは冒頭に「不斷の增殖傾向」を展示し、次で一應の要約的「三命題」を揭げはしたが、彼れは未だ（注意せよ！）、その何れを

1) Mombert, *Bevölkerungslehre*, 1929. S. 162 (punktiert von Minami).
2) Mombert, *Bevölkerungslehre*, S. 470.

も、又その何れの部分をも「人口の原理」とは呼んでゐないのである。而かも彼れの論題は、初版から最終版へと貫徹して、『人口原理論』――より正確には『人口の原理に關する一論』である。從つて、嚴密に云ふならば、彼れが最初に何を展示しようと、或は又如何なる定式的命題を樹立しようと、彼れが名付けて「人口の原理」と呼べるものゝ本體をこそ先づ最初に詮索しなければならない。たとへそれが、「人口問題それ自體を凡ゆる角度から照明せる概論書ではない」にしても、彼れの人口理論は、――若しもそれが此の論著の中に包含せられてゐるとすれば、――正にかの「人口の原理」と呼べるものを中核としてゐるに違ひない。マルサスの人口理論とは何かといふ問に答へる爲には、從つて先づ、「人口の原理」とは何かといふ問に答へられねばならない。

（C類） 此の意味に於て、キャナンの古典的解釋は、改めて後至者達の注意を要求するに値ひしよう。彼れがマルサスの「人口原理」と「人口理論」とを略ぼ同格に取扱つてゐることは、前に掲げた彼れの引用句より明白であるが、その事の當否は別として、「人口原理」の出所と一つの典型的解釋とを與へた先鞭だけは、これを認めなければならない[1]。即ち彼れは、「人口の原理」といふ語句が「殆んど確かに」――"very probably"――ゴドウィンの『政治的正義[2]』より取り入れられたことを指摘し、次でマルサス論著の各版に瞥見を投じながら、再び第一版に就いて最初に此の語句の現はれ來たる第十章の要約項目の一部[3]を引用し、そして云ふのである。「項目に於ける『人口の原理』が『それに依つて人口が生存資料の水準下に引き抑へらるゝ原理』（ゴドウ

1) Cannan, *Theories of Production and Distribution*, 3rd ed. 1917, pp. 134—135.

2) W. Godwin, *Political Justice*, 1793, p. 813, Bk. viii. chap. ii (quoted as original).

3) Malthus, *An Essay*, 1st ed. p. 173.

インの一句——引用者）と殆んど同じいことは、想像するに難くない。從つて恐らくは、次の事以上を云はんとするのは輕率であらうと思はれる。即ち、人口論の初版に就いては『人口の原理』とは、人口の增加は必らず窮困に依つて妨げられねばならないといふこと、そして第二版に就いてはそれは、人口の增加は必らず窮困か或は戒愼的動機かに依つて妨げられねばならないといふこと、これである。[1]」

私はこれを、古典的解釋、或は又、一つの典型的解釋、と稱したことであるが、それは私も亦、マルサス論著の一應の研究からは此の解釋以上に出で得ないと思ふからである。併し吾々は、此の解釋に止まつてゐてはならない。何故か？ 吾々はキャナンから、人口の生存資料に依る規制作用と、かゝる規制に發動する妨げの差別性とを、「人口の原理」に本質的な契機として學び取ることは出來る。從つて又「人口の原理」が、第一版と第二版（及びそれ以後）とでは、その意義內容に於て一つの本質的相違を示すといふこと、謂はば「人口の原理」が成長するといふこと、をも示唆せられはする。然し乍ら、かゝる規制作用は、マルサスが後版本の冒頭に於て展示せる人口の不斷の增殖傾向と如何なる關聯を有するか、規制作用は單に一回的從つて又絕對的にして——恰かもゴドウィンがアメリカ及びアジアの彷徨諸民族に就いて云へるが如く——「幾星霜を重ねるも人口は土地の耕作を必要ならしむる程增加したことはない[2]」底の、謂はば一種の靜止狀態を保持し續けるものであるか、進みては又、マルサスが此の「原理」に何か異なつたる意味を含めて用ひた場合はないか、そして最後には、この「人口原理」を其儘、彼れの人口理論と見ることの當否如何、等々の反問が湧出し來らざる

1) Cannan, *op. cit.* p. 135.
2) Godwin, *op. cit.*, see Cannan's *Theories*, p. 134.

を得まい。吾々は、すべてこれ等の反問に答へ得なければならない。

かくて私は、こゝでも又、キャナンの訓戒に背いて、敢て自からを「輕率」の作業に投じ込まねばならぬのである。

三、第一版に溯りての『原理』の詮索

さて、先づ、第一版に溯りての詮索の結果から云へば、マルサスは「人口の原理」を、多くの場合に於ては一つの意義で用ひてゐるが、他の場合では此れと異なる意義を含ましめてゐる形跡もある。要するに第一版に關する限りでは、嚴密に何が「人口の原理」であるかを云ひ得ない結果に到達する。マルサスはこれを、殆んど自明にして何の説明をも要せざる底の、確乎不拔の自然法則と解してゐたものとの印象も受ける。本文中に於て「人口の原理」the principle of population と云ふ名辭が初めて完全なる形で現はれて來るのは、實に第十章二〇八頁に於てであつて、全十九章三九六頁の第一版はその時既に半ばを過ぎてゐるのである。而もマルサスは、甚だ屢々、人口の原理を「天然の法則」the law of nature 或は又「必要の法則」the law of necessity とも呼んでゐるので、「原理」の詮索はこれ等の點をも顧慮して行はれねばならない。かゝる心構へから獲られたマルサスの諸章句は、略ぼ次の二類に撰別することが出來る。

（A類）　規制作用を指すもの

1 「動物界及び植物界を通じて、天然は生命の種を、極めて惜氣なく又大やうに、況く撒き散らした。天然は比較的に、彼等を育てるに必要なる場所と榮養と、を惜しんで來た。……必要といふこと、即ちかの、緊急普遍の天然法則(Necessity, that imperious all pervading law of nature)が、彼等を豫定の限界内に抑止する。植物種族及び動物種族は、此の大制限法則(this great restrictive law)の下に畏縮してしまふ。而して人間種族も、理性の如何なる努力に依つても、此の法則より免がれることは出來ない。[1]」

2 「人口と、土地の生産との、二つの力の、此の天然的な不同、及び、これ等の諸結果を不斷に均衡化すべき、かの、吾々の天然の大法則(that great law of our nature which must constantly keep their effects equal)は、……[2]」

3 「……人口の力はより優勢な力であるから、人間の種の增殖は唯だ、より强大な力への一障碍として働らく强力な必要法則の不斷の作用(the constant operation of the strong law of necessity)に依つて、生存資料の增加と平衡を保たしめられるの外はない。[3]」

4 「……何れの國に於ても、それが生産し若くは獲得し得る食物を越にて人口の增殖せんとするのを防止する必要の大法則(the great law of necessity)は、然かく吾々の觀察に開かれたる、又吾々の理解に然かく顯著明白なる法則であるから、吾々は一瞬時と雖もそれを疑ふことは出來ない。……[4]」

5 「ゴドウィン氏は、その著の第八編第三章[5]の結論に於て、人口を論じて云ふ、『人間社會には一の原理があつて、これに依り人口は絶にず生存資料の水準下に引き抑へられてゐる(a principle in human society, by which population is

---

1) Malthus, *An Essay*, 1st ed. pp. 14—15 (dotted by Minami); slightly altered, 2nd ed. p. 2; 6th ed. vol. i. pp. 2—3.
2) 1st ed. p. 16.
3) 1st ed. p. 26; altered, 2nd ed. p. 8; 6th ed. vol. i. p. 11.
4) 1st ed. p. 128; 2nd ed. p. 347; 6th ed. vol. i. pp. 529—530.
5) Malthus quotes here from the 3rd ed. of the *Political Justice*, 1798, vol. ii, p. 467, as mentioned in Bonar's Notes on *Malthus's First Essay*, p. 26.

perpetually kept down to the level of the means of subsistence)。だからアメリカやアジアの彷徨諸族の間にあつては、幾星霜を重ねても、人口が、土地の耕作を必要ならしめる程、増加した例しはない、』と。ゴドウィン氏がかやうに、或る神祕不可思議な原因の如く記述して、氏自身これを探究しようとは企てゝゐない此の原理こそ、必要の粉碎法則(the grinding law of necessity)——即ち窮困及び窮困の恐怖(misery and the fear of misery)、に外ならぬことが見出されるであらう。[1]」

6 「ゴドウィン氏が、『人間社會には一の原理があつて、これに依り人口は絶えず、生存資料の水準下に引き抑へられてゐる、』といふて居るのは、完全に正しい觀察である。唯だ問題はかうだ、此の原理とは何か? それは或る曖昧不可思議の原因であるか? それは或る時期に、男をして不能たらしめ、女をして石女たらしめる天帝の、或る神祕なる干渉であるか? 若くは又、それは吾々の探索に開かれたる、吾々の觀察の屆き得る一原因、即ち、たとひ其の力は種々異なつても、人間の住みとし住める凡ゆる社會段階を通じて不斷に作用すると見られた一原因、であるか? それは、人間の諸制度が悪化せしめて行くどころか却つて著しくこれを緩和——全然除き去ることは出來ないまでも——する傾向のあつた所の、或る程度の窮困、即ち天然諸法則(複數形に注意せよ! 引用者)の必然不可避の結果(a degree of misery, the necessary and inevitable result of the laws of nature)ではないのであるか?[2]」

(B類) 増殖傾向を指すもの

1 「社會に於ける何れの著大なる改善の途上にも横はれる大障碍が、吾々の到底、克服の望みを繋ぎ得ない性質のものであるといふことは、確かに、甚だしく意氣を沮喪せしむる一回想である。(だが)生存資料以上に増殖せんとする、人間種族に於ける恒久の傾向(the perpetual tendency in the race of man to increase beyond the means of subsistence)は、

1) Malthus, *An Essay*, 1st ed. pp. 175—176; slightly altered and the adjective "grinding" dropped, 2nd. ed. p. 367; 6th ed. vol. ii. p. 19.

2) 1st ed. pp. 193—194; slightly, altered, 2nd ed. pp. 373—374; further altered, 6th ed. vol. ii. pp. 28—29.

吾々がその變化を期待すべき如何なる理由をも有し得ざる、生物天然の普遍法則の一つ (one of the general laws of animated nature) である。....」[1]

2「人口が食物よりも遙かに急速に增殖すべしといふこと、....此の普遍法則 (this general law) は、....」[2]

3「さて人口の原理に歸るならば、....」「人口がそれに從つて增殖する所の原理（注意せよ！ 引用者）(the principle, according to which population increases) は、普遍法則から、創造の高目的を妨害することから發出する部分的弊害たる、人類の諸罪惡、若くは天然の諸事變、を豫防する。此の原理は、地上の住民を常に、生存資料の水準一杯に (fully up to the level of the means of subsistence) 保たしめる。そしてそれは、不斷に、人間を驅つて土地の耕作を擴大せしめながら、やがて又、より增大せる人口を扶養することを可能ならしめるといふ、强力なる一刺戟として人間の上に働らきかけるのである。さり乍ら、此の法則は、部分的弊害を誘發することなしに發動し、且つ、それなしに、至上者によつて明白に意圖せられたる諸結果を生ぜしめる、といふことはあり得ないのである。洵に、人口の原理 (the principle of population) が、個々の國の諸事情に從つて改變せられざる限り、....謹勉によつて助成せられて、僅かの年數の中に肥沃なる地域に人間を住まはしめるであらう此の同じ原理 (the same principle, which, ... will people a fertile region in a few years) が、既に久しく住まはれてゐた國々に於て困厄を生ぜしめねばならぬ、といふことは明瞭である。」[3]

以上二つの類別下に集め錄せられたる、第一版からの諸章句を通覽して、吾々は今何を見出し得るであらうか？

先づA類に關する限り、マルサスが「緊急普遍の天然法則」の下に、「大制限法則」の下に、「天然の大法則」

1) 1st ed. p. 346.
2) 1st ed. p. 361.
3) 1st ed. pp. 363, 365—366.

の下に、「強力なる必要法則」の下に、更には又「必要の粉碎法則」の下に、理解せるものこそ、人口は必らず生存資料に依つて制限（規制）せられるといふ、かの、謂ゆる三命題の第一（本稿一四九頁を見よ）に當つて居り、更に云ひ換へれば、人口は必らず生存資料の水準下に「引き抑へられる」"to be kept down" 若くは「均衡化せられる」"to be kept equal" といふ規制作用或は均衡作用を表現してゐる。唯だA類5及び6には「窮困及び窮困の恐怖」乃至は「或る程度の窮困」（此の語句は第二版以下に於て同じく「窮困及び窮困の恐怖」と改められた。[1]）といふ語句が現はれ、而かも前の場合では「必要の粉碎法則」と同格に置かれ、後の場合では此の法則の必然不可避の結果」となされて居るの相違があつて、吾々はその何れをマルサスの眞意と解すべきかに聊か迷はざるを得ないのであるが、かの謂ゆる三命題の第三（本稿一四九頁を見よ）に於ては「窮困」が「惡德及び道德的抑制」と並びて——第一版に就て云へば「惡德」と並びて——人口增加の妨げの一種となされてゐたことに想ひ到るならば、この意義に於ける misery が「法則」そのもの、「原理」そのもの、と解し得る餘地はないであらう。「法則」として、「原理」として其處にあるものは、依然として規制作用である。無論マルサスに於ては、謂ゆる「妨げ」の種別も肝要であり、又、これあるが爲に全體としての彼れの所論は獨自性を有し來るのであるが、右に揭げたA類の諸章句を一貫して流れるものは規制作用であり、均衡作用である。かゝる作用が人間社會に於て主觀の側から何と感ぜられるか、若くは又如何なる仕方に於てかゝる作用が自からを貫徹するか、といふ場合に初めて「窮困及び窮困の恐怖」が問題となるのではないか？

1) see, 2 nd ed. p. 374; 6 th ed. vol. ii. p. 29.

かくて吾々はA類から、マルサス人口理論の本質的一成素を見出す。生存資料に依る人口の規制作用、これである。併し私は同時に、讀者に向つて注意を促がさねばならない。マルサスは、多分の誇大的、激越的な、——恐らくは確乎不動の信念と青年的熱情とに由來せる——修飾語を冠して「法則」と呼び、「原理」と稱してはゐるが、A類の諸章句の終る個所までは、彼れは未だ「人口の原理」といふ語を用ひてはゐないのである。此の語が完全な成語として初めて本文中に現はれるのは、前に指摘した通り、第十章の末尾に於てである。即ち曰く、

「……ゴドウィン氏の社會制度が最も完全な形で建設せられたとしても、幾百年はおろか、三十年も經たないうちに、簡單な人口の原理 (the simple principle of population) から完全に破壞してしまふであらう。」[1]

そして此の章の要約項目を返して見ると、其處にはかう書かれてある。

「……——ゴドウィン氏の美はしき平等制度が實現せられたと想像す。——そは三十年も經つか經たぬ短期間内に、簡單に人口の原理から (simply from the principle of population) 潰滅す。——」[2]

然らば、こゝにいふ「簡單」な「人口の原理」は、かのA類に見られた規制作用を指すのであるか？ それを直ちに肯定するに就いての證左はない。吾々が今云ひ得ることは、規制作用は「人口の原理」と無關係ではないが、規制作用即人口原理ではない、といふこと以上に出るを得ない。何故であるか？

こゝで改めて、かのB類下の諸章句が想起せられねばならぬ。其處に於てマルサスが、「生物天然の普遍法

1) *An Essay*, 1 st ed. p. 208 (dotted by Minami).
2) 1 st ed. p. 173, heading.

則の一つ」とし、「人口の原理」と――懸け離れてではあつたが――呼べるものこそ、「生存資料以上に増殖せんとする、人間種族に於ける恒久の傾向」であり（B類1を見よ）、「人口がそれに従つて増殖する所の原理」ではなかつたか？（B類3を見よ）。其處には、生存資料に依る人口の規制作用を離れて、此の生存資料以上に出でんとする人口の不斷の増殖傾向が表現せられてゐる。甚だ些細なことのやうではあるが、B類3に於て「此の原理は、地上の住民を常に、生存資料の水準一杯に（fully up to the level）保たしめる」と云ふて居るのも、これを、今までA類の諸章句に於て人口が生存資料の「水準下に引き抑へられる」（to be kept down to the level）、若くは「均衡化せられる」（to keep equal）と云ふてゐたのと比較すると、そこには單なる表現の相違以上のものが存するのに氣付くであらう。後者は、一度びそれを越えて増殖してしまつた、若くは將に増殖せんとする人口が、現存の生存資料の範圍内に制壓せられ抑止せられる姿を描く。從つて其處では、人口は事實上、生存資料の水準一杯に保たれてゐるか、若くは又、かゝる水準より多かれ少なかれ遠ざかつた所にまで制壓されてしまつたか、は問ふ所ではない。これに反して前者は、かくも制壓抑止せられたる人口がその本然の力に基いて生存資料の「水準一杯」の所まで押し進み、絶えずそれを乗り越えようとする勢、を含意してゐる。制壓の姿と、増殖の勢とは、同じでない。そして此の増殖の勢、不斷の傾向を、マルサスは――第一版を通じて唯だ一個所で、而かも多分の不明確さを以て――「人口の原理」と呼んだのである。

以上の詮索から、次の二つのことが略ぼ明白にならうとしてゐる。即ち

一、マルサスに於て「人口の原理」といふのは、人口の増殖傾向を指したのではないかといふこと。併し

二、規制作用も「天然法則」「普遍法則」乃至は「原理」と呼ばれてゐることから、彼れの理論の骨格を成すべき「原理」は一つではなく、少くとも二つあつたのではないかといふこと。

そこで私は、先づ右の第一點を確かめるため、「人口の原理」が用ひられた他の凡ゆる場合を檢索して見る必要がある。すると「人口の原理」は、前掲B3、及び同じく前掲のゴドウィンの平等主義を批判せる一章句以外では、――私が見落しを犯さなかつた限り、――更に次の四個所で現はれて來る。

（C類）

1「將來人間が地上に於ける不死の方向へと接近するといふことに就いてのゴドウィン氏の臆說は、人口の原理よりする彼れの平等主義への反對論を排除すると自稱せる一章中に、甚だちぐはぐな形で置かれてゐるやうだ。……」[1]

2「人口の原理からして、充分に給與せられ得る者よりもより多くの者が常に欠乏狀態に陷るだらうといふことが、明白になつた。……」[2]

3「……人口の原理から、或る者は、他の者よりもより多く、必らず欠乏狀態に陷るに違ひない。……」[3]

4「……天然上、並びに人倫上の諸惡の存在……、それは人口の原理より生ずる、……」[4]

右は、その第一章句を除いて、「人口の原理」を諸惡の根源たるものとして用ひて居る場合で、若しこれに

1) 1st ed. p. 219.
2) 1st ed. p. 291.
3) 1st ed. p. 299.
4) 1st ed. p. 394.

B類3の末尾の一節——即ち「此の同じ原理が、久しく住まはれてゐた國々に於て困厄を生ぜしめねばならぬ、云々」——を加へ、更にこれに、マルサスが第一版を通じて唯だ一度「人口の原理」に代ふるに「人口の法則」を以てした次の一句、即ち

5「人口の法則 (the law of population) に由つて惹き起こさるゝ周知の諸困難……」[1]

を添へるならば、「人口の原理」をかゝるものとして使用せる凡ゆる場合を網羅し得るであらう。むろん吾々は、これらC類の諸章句から、「人口の原理」は規制作用でなく増殖傾向を指したといふ直接の證左を掴み取ることは出來ない。然し乍ら「人口の原理」が、マルサスにあつては、天然上及び人倫上の凡ゆる惡の根源であり、從つてそれは、凡ゆる社會將來の改善途上に於ける、完全化途上に於ける「打ち勝ち難き」、乃至は「乘り越え難き大困難」[2]であつたといふことから、むしろ間接に、しかし動かし難く、「人口の原理」は單に規制作用でなしに人類の不斷恆久の增殖傾向を指してゐたのではないか、といふ私の立言を裏書きするであらう。若しもそれが、單に規制作用をしか指してゐなかつたとしたならば、何故に「人口の原理」が「三十年も經つか經たぬうちにゴドウィンの平等主義社會を潰滅してしまふであらう」といふ、あのゴドウィン批判の主論旨が意味をなさぬであらう。規制作用は單に、人間は食物なしには生き得ないといふこと、即ちかの、「食物は人間の生存に必要である」[3]といふ、自明にして「何等の說明をも要しない」[4]第一公準から抽き出されたものであつて、このこと自體からしては、何故に社會將來の永久的改善が不可能となるかゞ明かとならねばかりでな

1) 1st ed. p. 366.
2) 1st ed. pp. 7, 16.
3) 1st ed. p. 11.
4) 1st ed. p. 37.

く、溯つては、凡ゆる時代、凡ゆる社會の歴史を通じて、何故に又如何にして人間が「幸福と不幸との間の逆轉及び進轉の擺動」を繰り返へして來たかに就いてのマルサスの重要な思想（後節にて詳論）が解せられぬであらう。人口の不斷の增殖傾向が、規制作用を通じて、かゝる「擺動」を繰り返へすのであり、やがて又それが、社會將來の永久的改善を妨げるのである。故にマルサスは云ふのである。

「……すべての社會に於ては、然り最も惡德なる社會にあつてさへ、有德なる性的愛着への傾向が極めて强烈である、從つて其處には人口の增殖への不斷の努力（a constant effort towards an increase of population）が存してゐる。此の不斷の努力が又不斷に、社會の下層階級を困厄に陷し入れ、そして彼等の狀態の如何なる永久的大改善をも防止する傾向がある。」[1]

以上によつて、その凡ゆる場合の用語例に徵し且つは又その主論旨に關聯せしめて、マルサスの謂ゆる「人口の原理」が、生存資料以上に乘り越えんとする「人口の不斷の增殖傾向」、乃至は「人口の增殖への不斷の努力」に外ならぬことが、略ぼ明かとなつた。今に至つても尙ほ私は「略ぼ」といふ。最終版に就いての詮索は、私をして完全に、此の語を取り去らしめるであらう。そしてその時こそ完全に、規制作用を人口原理とな す世上流布の解釋を、一掃するであらう。然し、それ迄に猶ほ、答ふべきもう一つの問題が殘つてゐた筈である。それは即ち、マルサスが「人口の原理」といふ辭句を完全な形で用ひたのは人口の增殖傾向を表現する場合のみであつたとはいへ、彼れは單に此の增殖傾向をだけではなく、かの規制作用をも共に、「天然法則」とし、「普遍法則」とし、「原理」として居る事實から、マルサスに於ける「原理」は一つではなくて少くとも

1) 1st ed. p. 29; cf. 6th ed. vol. i. p. 17 (altered).

二つあつたのであるか、それとも又、「人口の原理」には規制作用と増殖傾向との二面が含意されてゐたのであるか、といふ疑問である。

これは、適確には答へ難い。青年マルサスは、否、匿名の一青年論客は、「法則」を、「原理」を、濫用し過ぎてゐる。人口の増殖傾向も「原理」「法則」であれば規制作用も「原理」「法則」であり、更には「食物の必要」、「性愛の必要不變」といふあの二公準も「法則」であり「我が天性の確定法則」であり[1]、甚だしきに至つては「財産の安固と、結婚の制度」も人間社會の「二根本法則」なのである。[2] かつてケエーラーは、マルサスを以て、近代的意義に於ける「法則」の概念を國民經濟學に導入した最初の人と論じた。[3] 併し、見らるゝ通り、そこには餘りに多くの濫用がある。が、それは兎に角として、今吾々に問題となつてゐる規制作用にのみ就いて云ふならば、マルサスがそれを「原理」と稱してゐることに疑ひはないし、又此の原理が「人口の原理」以外のものであるとする明確なる反證は何處にも存しない。たゞ彼れが、第一版序文に於て、その先鞭の功を他の著者達に讓りながら、

「人口は常に生存資料の水準下に引き抑へられねばならぬといふことが、多くの著者によつて注意せられてゐたのは明白な事實である。然し、本著者が想起する限りでは、この水準がそれに依つて作り出される方法を、特別に研究した著者はない、……」[4]

といふて居る場合、彼れは明かに規制作用を問題としてゐるので、「人口の原理」が規制作用以外のものであ

1) 1 st ed. p. 11.
2) 1 st ed. p. 203.
3) W. Köhler, *Die sozialwissenschaftliche Grundlage und Struktur der Malthusianischen Bevölkerungslehre*, Diss., Berlin 1913, S. 15—16.
4) 1 st ed. preface, p. iii.

るとする推斷よりも、むしろ規制作用をも含むといふ推斷の方が、幾分多くの確からしさを有するが如くにも思へる。併し彼れは又、本文第一章では、かうも云ふてゐる。

「私が云はうとする最主要の論議は、必らずしも新規ではない。此の論議の據つて立つ諸原理 (the principles) は、……」[1]

「原理」は一つではないのである。從つて、規制作用も亦「人口の原理」中に含まれて居ると解するよりも、それは又別の「原理」である、少くともマルサスの『人口原理論』は二つ（若くはそれ以上）の「原理」から成り立つてゐる、と解する方がより適切であらう。かくて私は、第一版に溯つての詮索から、一應次の結末に達する。曰く、

マルサスの人口理論には二つの原理がある。一は規制作用に關する原理、二は增殖傾向に關する原理。マルサス自身は後者をのみ「人口の原理」と呼んだ。私はこれを區別して、假りに、前者を「規制原理」と呼び、後者を「增殖原理」と名づける。而して讀者は今直ぐに、私がかくも煩鎖な作業から漸くにして拾ひ上げた「增殖原理」を、――然り其の名稱すらが――後版の到る處に散在するのを見らるゝであらう。良かれ惡しかれ『人口原理論』は、要するに成長するのである。

四、最終版に就いての『原理』の詮索

『人口原理論』は、一八〇三年には、字數に於てその初版に約四倍する大冊「大增訂・新版」（四折判全一卷）

1) 1st ed. p. 8.

となり、その後、多かれ少なかれ修訂増補が加へられながら、一八〇六年には第三版、一八〇七年には第四版（各々八折判上下二巻）と矢繼ぎ早やに版を重ね、一八一七年には上中下全三巻の第五版を、そして一八二六年には組方を變へて再び上下全二巻に壓縮せる第六版を、市場に送つた。その時マルサスは、既に満六十歳に達してゐた。彼れはその後尚ほ九年近くを生き長らへたが『人口原理論』は、彼れ自身の手に成るものとしては第六版に止まり、これが事實上の最終版となつてゐる。彼れの歿後には尚ほ幾種かの版本が出たが、本稿に於て私が第六版として引用するのは、すべて一八二六年の原本第六版である。

そこで此の最終第六版に就いての「原理」の詮索であるが、私は既に第一版に溯つての煩鎖な詮索を以て、讀者の多くに倦怠を催ほさせたに相違ない。それは併し、私の作業が不手際はな爲めばかりではなかた。マルサスが、『人口原理論』が、その責を負ふべきものであつた。然し今度は幸に、もつと簡潔に作業を果たし得る。圓熟せるマルサスの思想と表現とは、それを可能ならしめるであらう。——さて、かの第一版に於て、人口の不斷の増殖傾向を指すものとして現はれたる「人口の原理」の、かすかなる萠芽形態は、後版に於て如何に現はれるであらうか？

マルサスは次の諸章句を以て、明瞭に、かう答へる。

（A類）「人口の原理」は増殖傾向を指す。即ち

I　北歐古代の住民を論じた章の終りて、

「然し乍ら、私は決して、北方の諸民族が自國内に於ける食物の不足や其他の事情に促がされない限り、未だ曾つて一回の遠征も企てなかつた、などと云ふのではない。マレー (Mallet) の述べて居る所では、彼等は何れの地方に戰を挑むべきやを議するため、毎春集會を開くのが普通の慣例であつたといふが、これは恐らく事實であつたらう。そしてかくも戰爭を熱愛し、最强者の權利を神聖の權利と考へてゐた人間共の間にあつては、戰爭の機會には事缺かなかつたであらう。のみならず、此の純粹無垢の好戰心と冒險心の外に、内紛や、戰捷軍の壓迫や、より溫和なる風土への憧れや其他の諸原因が、移住を促したこともあらう。併し私は、此の問題を鳥瞰する時、歷史上の此の時期こそは人口の原理 (the principle of population) の極めて顯著なる例證を供するものと考へざるを得ない。此の原理とは即ち、私の見る所では、ローマ帝國の沒落をひき起こさしめたところの、かの矢繼ぎ矢やなる冒險的入寇と移住とに對して、最初の刺戟と原動力とを與へ、これに不盡の源泉を供し、そして屢々その直接の原因となつたものであり、又、ローマ沒落の後には、デンマーク及びノルウェーの住民稀薄なる國々から殆んど二百年にも亙つて流出し、ヨーロッパの大部分を劫掠蹂躙したところのもの、に外ならない。洵に、アメリカ合衆國に於けるが如き强力な增殖傾向を假定せずしては、右の事實は私に取つては說明し難いものである。……」[1]

2

アリストートルがプラトオ說の矛盾を指摘したことを說いた後で、

「これ等の章句からして、アリストートルが、人類の强力なる增殖傾向 (the strong tendency of the human race to increase) は、嚴重且つ積極的なる法律に依つて防遏せられざる限り、財產の平等に立脚せる何れの制度に取つても絕對に致命的であることを、明白に看取してゐたものと思はれる。…彼れがその後、スパルタに就いて爲した所論からして、彼れが人口の原理 (the principle of population) を全く了解してゐたことは、尙ほ一層明白であらう。……」[2]

---

1) *An Essay*, 6th ed. 1826, vol. i. pp. 117—118; cf. 2nd ed. pp. 83—84.

2) 6th ed. vol. i. p. 240; cf. 2nd ed. p. 168.

3 十九世紀初頭のイギリス人口の異常なる増加を説いて、

「……それは、農業及び工業の兩面に於ける生産力 (power of production) の激増と結び付いて居るところの、勞働に對する需要の激増、に刺戟されて起つたのである。農業と工業とは人口の急速なる増加に對する最も有効な促進を形成する二要素である。眼前の現象は人口原理 (the principle of population) の顯はな一例證であつて、大都市や、工業的職業や、次第に獲得された富裕奢侈の慣習にも拘らず、若しも一國の資源が急速なる人口増加を許容するならば、そして若しもこれ等の資源が勞働に對する不斷の増加需要を惹き起こす如く都合よく配分されるならば、人口は必らずこれと歩調を合して進行する、といふことの一證明である。[1]」

4 第三編第十四章中の一脚註に於て、

「人口の原理 (the principle of population) に從へば、人類は食物よりもより急速に増殖する傾向を有してゐる。それ故に一國の人口は食物の許す限界まで充滿するの不斷の傾向がある、けれども天然の諸法則 (the laws of nature) に依つて、決して此の限界を越ゑることは出來ない。食物の此の限界といふのは、無論、停止的人口を支へる食物の最低量のことである。だから嚴密に云へば、人口は決して食物に先行し得ないのである。[2]」

以上によつて、今や、「人口原理」の何物であるかゞ、愈々明白となつた。マルサスの解する「人口の原理」は、かの規制作用ではなくて、生存資料以上に出でんとする人口の不斷の増殖傾向なのである。規制作用が、「人口の原理」とは別の「法則」であることは、前掲4の一文によつて知られ得よう。そして吾々はこれと同時に、かの謂ゆる三命題の第二、即ち「人口は、或る甚だ強力且つ顯著なる妨げに依つて防止せられざる限

1) 6th ed. vol. i. pp. 440—441 (not appeared in the 2nd ed.).
2) 6th ed. vol. ii. p. 243 note.

り、生存資料の増加する所では必ず増加する、」といふ命題（本稿一四九頁を見よ）が「人口の原理」以外の何物でもなく、不斷に生存資料の水準をその底部より激衝しつゝある人口が此の水準の高昇に伴ふて膨脹し行くといふ姿、即ち實は「増殖傾向」の、「人口原理」の、單なる一樣相に過ぎないことを、今や前掲3に依つて明白に知るのである。

然らば次にマルサスは、此の「増殖傾向」を、私が第一版に溯つての詮索結果から假稱したやうに、彼れ自身、「増殖原理」と呼んだ場合はないか？　答へてマルサスは曰く、

（B類）　増殖傾向を「増殖原理」とも謂ふ。即ち、

1　アメリカ・インディアンの間に於ける人口の妨げに就いて、

「アメリカ・インディアンの間に起こつた異常なる人口減退そのものは、或る人々には、本書に於て樹立せんと志向されてゐる理論（theory）に矛盾すると見ゐるかも知れない。だが併し、この急速なる（人口）減退の原因も、すべて結局は、前述せる三つの大きい妨げ（惡德・窮困・道德的抑制——引用者）に歸着するのであつて、これ等の妨げが格別の事情から異常の力で作用し、時には増殖の原理（the principle of increase）を凌駕する場合もないとは限らないのである。」[1]

2　史家タシトゥスを引用して、ゲルマン民族の生活狀態を描寫した後で、

「かゝる風俗に加ふるに、冒險と移住との習慣があつて、これがおのづから、一家を扶養するに就いての凡ゆる恐怖を除き去つたわけで、これよりもより強大な増殖の原理（a stronger principle of increase）を有つ社會を考へることは困難な程である。そして此の原理が、取りも直さず、ローマ帝國の力がかくも長き間たゞ〳〵の形でそれに對抗し、そして

1）*An Essay*, 6th ed. vol. i. pp. 64—65; cf. 2nd ed. p. 44.

遂にはそのもとに降服するに至つた所の、かの陸續たる軍隊と植民との、汲めども盡きぬ源泉であつたのである。……」[1]

3 アジアに於ける牧畜民族を述べた個所で、

「……次ぎ次ぎに現はれ來たる征服者の大鎌に、絶ねず新たなる人間收穫を供し得たところの、かの增殖原理 (the principle of increase) の力强さに、……」[2]

4 アフリカ土人の記述に次いで、

「同じことは、曾つて榮ねた、そして人口稠密なりしエジプトに就いても云はれ得る。その現在の沈滯せる狀態は、增殖の原理 (the principle of increase) が弱まつたことに由來するのではなく、實は亂暴極まる壓制的な政治に基づく財產の不安固のために、勤勉と先見の原理 (the principle of industry and foresight) が弱まつたことに由來するのである。增殖の原理は、エジプトに於ては現在、その爲し得るだけの事をしてゐる。それは、人口をば、生活資料の水準一杯に保つてゐる。よしんば此の原理が現實の十倍に增したところで、それ以上のことは爲し得ない。」[3]

讀者は、もう充分だと云はるゝであらうか？ 私も、「よしんば此れ以上增し加へて見たところで、右の諸章句が示す以上のことは爲し得ない、」と思ふ。それでもなほ、もう一つ二つを增し加へて、存分にマルサスをして語らしめようではないか。

5 プラトオの人口觀を述べた後で、その結論として、

「これらの章句から判ずれば、プラトオが、人口は生存資料以上に增殖せんとする傾向あることを、看破してゐたのは

1) 6th ed. vol. i. p. 110; cf. 2nd ed. pp. 77—78.
2) 6th ed. vol. i. p. 122; cf. 2nd ed. p. 86.
3) 6th ed. vol. i. p. 161; cf. 2nd ed. pp. 113—114.

明瞭である。それを防止するために提案した彼れの方法は、まことに呪ふべきものではあつた、併し方法それ自身、及びそれが適用されてゐる範圍は、彼れが如何に此の難問を重視せるかを示すに足りる。彼れが、一方に於ては、戰爭に依つて失はるゝ多大の生命を考慮に入れてゐながら、——狹小なる共和國に於ては斯くあるべきは勿論であるが、——他方に於て、あらゆる劣等不完全なる市民の生む子供を殺し、所定年齡及び所定形式以外で生れた子供を皆な殺し、結婚年齡を晩く定め、そして結局これらの結婚の數を調節するが如き方策を提唱した所以のものは、彼れの經驗と彼れの推理とが、彼れをして增殖原理の强大な力 (the great power of the principle of increase) と、それを防遏するの必要とを、痛感せしめたからに外ならない。[1]」

6

第二編第十一章、結婚の產兒率に就いて、

「…然しながら、若しも增殖の原理なるもの (any principle of increase) が存するならば、換言すれば現世代の一結婚が次の世代に於ける一以上の結婚——再婚・三婚を含めて——を產むならば、死亡による世代の推移に比べては、これらの世代が繰り返へされること速かなればなる程、人口の增加は益々速かとなるであらう。[2]」

かゝる用語例は、なほも後の部分に於て現はれて來る。[3] マルサスは後版に於ては「人口の原理」といふ代りに、より屢々、より明確なる「增殖の原理」といふ語を用ひ、そして此の原理を從横に驅使し乍ら、資料と踏査——彼れは第一版の刊行後二回迄も大陸諸國を、そして後年にはウェールズ及びアイルランドを、踏査した——の屆き得る限りの範圍に於て、凡ゆる時代、凡ゆる民族の人口運動を探索し、以て此の「增殖原理」が、「人口原理」が、『過去及び現在を通じて人類の幸福に及ぼせる諸結果を觀察』[4] しようとしたのである。

1) 6th ed. vol. i. p. 237; cf. 2nd ed. pp. 166—167.
2) 6th ed. vol. i. p. 488 (not appeared in the 2nd ed.).
3) see e. g. Appendix to the 5th ed. 1817: 6th ed. vol. ii. pp. 487, 496.
4) subtitle of the 2nd and following editions.

然らば次に、前節の終りで私の假稱した「規制原理」はどうなつたか？　マルサスの人口理論は、單に一つの原理からではなく、複數の「諸原理」から成り立つてゐるのではないかといふ私の措定は、最終版に就いての詮索から何う確言することが出來るか？

前掲A類4の一章句（本稿一六九頁を見よ）からしても、「人口原理＝增殖原理」が「規制原理」と別のものと考へ得ることは、既にこれを說いた。併し此の脚註の一章句以外に、私の推斷に役立つ直接の手懸りは見當らない。そこで、此の一脚註――それは第二版になく、第五版では現れてゐる[1]――に於て「人口原理」の外に「天然の諸法則」(the laws of nature) と謂へるものは、單に輕く「天然の理窟」とでも解する方がむしろ適當かとも一應は思はれもするが、併しマルサスは滿六十歲の晩年に於てさへ、なほ依然として、此の規制作用を「緊急普遍の天然法則」「大制限法則[2]」、乃至は「必要の大法則[3]」と呼んでゐるのであるから、――さすがに彼れは、第二版[4]に於てもなほ用ひてゐた「天然の粉碎法則」の「粉碎」だけは、後版に於て削り取つてしまつたが[5]――これを輕く取扱ふことは許されまい。規制作用は別の一つの「原理」であつていゝ。マルサスの人口理論には複數の「諸原理」があるのである。このことは第一版に就いても指摘したが、最終版に就いては一層の確實さを以て然か謂ふことが出來る。即ち例へば、

「スウィスの狀態は多くの點でヨーロッパの他の諸國と異なつて居り、そして此の國に就いて蒐集された事實の或るものは非常に興味に富んでゐて、本書の一般諸原理 (the general principles of this work) を非常に有力に例證する傾きがあるの

1) 5th ed. 1817, vol. iii. p. 47.
2) 6th ed. vol. i. p. 3.
3) 6th ed. vol. i. pp. 293, 529; 2nd ed. pp. 208, 347.
4) 2nd ed. p. 367.
5) e. g. 5th ed. vol. ii. p. 245; 6th ed. vol. ii. p. 19.

て、これを別に離して考察するに値ひすると思ふ。」[1]

と述べて居り、これと全く同じ用法はなほ後の數個所[2]に於て現はれてゐる。そして彼れは又、或る場所[3]に於ては「人口に關する自然の諸法則」(the laws of nature respecting population) とも謂ふてゐるのである。

かくて私は、第一版に始まつて第六版に終りを告げた「法則」「諸法則」、「原理」「諸原理」の詮索から、次の確言と推斷とを——マルサス的表現をもつてすれば "fairly" に、なすことが出來よう。

第一、マルサスの謂ゆる「人口の原理」とは、絶えず生存資料以上に乘り出でんとする人口の不斷の增殖傾向を意味してゐた。

第二、マルサスは此の增殖傾向を、甚だ屢々「增殖の原理」と呼んだ。從つて「人口の原理」は即「增殖の原理」であつた。

第三、マルサスに於ける「原理」は一つではなかつた。(以上第一・第二と共に確言)——私はこゝからマルサスに於て根幹的な二つの原理を摑み取る。一に曰く「增殖原理」、二に曰く「規制原理」。

さて然らばマルサスは、此の二つの原理を土臺として如何に彼れの人口理論を打建てようとしたか?

五、『規制原理』と『增殖原理』——人口擺動の理論

「規制原理」と「增殖原理」とは、マルサスに於ては、一應別の原理であつた、併し同時にそれは不可分の原

1) 6th ed. vol. i. p. 337; 2nd ed. p. 267.
2) e. g. 6th ed. vol. i. p. 363 (2nd ed. p. 285); and further: vol. ii. pp. 443, 468 note, 469, 470, etc.
3) 6th ed. vol. ii. p. 282; 2nd ed. p. 503.

理でもあつた。……

即ち先づ、人間は食物なしには生き得ない[1]、從つて「人口の増殖は必然に生存資料に依つて制限せられる[2]」(＝規制原理)。併し人間の性的愛着は極めて强烈であり[3]、これに裏付けられて人間は絶えず、與へられたる生存資料の水準を一杯に滿たし乍ら[4]、その裏からこれに衝擊する、即ち人口は、所與の「生存資料よりも、より速かに増殖せんとする不斷の傾向[5]」を具有してゐる(＝増殖原理)。むろん、この増殖傾向がそれ自からを實現化して、人口が生存資料の水準以上に乘り出でてしまふといふことは「嚴密には」あり得ないし[6]、又、たとひ乘り出でてしまつたとしても、それはやがて元の水準下に抑止せられてしまふの外はない(＝再び規制原理)。併し人間は、絶えず此の規制原理に支配されながらも、否、この原理あるがためにこそ、生存資料の水準を高め揚げんと努力する、洵に「必要は發明の母[7]」となる、從つて「人口は、或る甚だ强力且つ顯著なる妨げに依つて防止せられざる限り、生存資料が増加する處では、常に増加する[8]」に至り(＝再び増殖原理)、そしてそこで、擴大せられたる新たなる高さに於て水準が保たれるのである(＝三度び規制原理)。とはいへ人間は、所與の生存資料の水準を高め且つ擴大する努力に於て何時でも成功するとは決まつてゐない、それは「土地の性質」が人間の努力に一定の限界を置くことにも由るが[9]、さうでなくてさへ生存資料の水準が自然的に落下し縮少して、それに抗せんとする人間の努力を、人間の生命自體を、瞬間に劫奪し去る場

1) 1st ed. pp. 11, 37.
2) 6th ed. vol. i. pp. 23, 533; cf. 1st ed. p. 140.
3) 1st ed. pp. 11, 29; cf. 6th ed. vol. i. p. 17.
4) 1st ed. p. 365.
5) 6th ed. vol. i. pp. 2, 17, etc; cf. 1st ed. pp. 29, 346, etc.
6) 6th ed. vol. i. p. 523, vol. ii. p. 28; cf. 1st ed. p. 193; and further compare, 6th ed. vol. ii. pp. 449—450.
7) 6th ed. vol. i. p. 281; 1st ed. p. 358.
8) 6th ed. vol. i. pp. 23, 533; cf. 1st ed. pp. 37, 140.
9) 6th ed. vol. i. pp. 7, 9; vol. ii. p. 451; cf. 1st ed. pp. 22, 106—107 note.

合が屢々起つて來る。凶作に基づく飢饉がそれだ。だが、この飢饉すらが、かの「增殖原理」が「人民の下層階級に殆んど食ふや食はずの生活を餘儀なくせしめる結果、不作に基づく僅かなる食物不足でもこれを轉じて慘澹たる飢饉に化せしめ」[1]たものに外ならない。かくて「溢剩人口を掃蕩」[2]することに依り、こゝに新たなる、併し今度は落下せる、水準が作り出されるに至る（＝別の方向に於ける規制原理）。……二つの原理の相互作用……人口の上昇的及び下降的運動の反復。……かくて吾々は遂に、マルサスの人口理論にと到達する。

彼れは先づ、後版本第一編第二章に於て、「人口增殖に對する種々なる妨げ、並びにそれらの發現樣式」を記述し、一方では「積極的、及び豫防的妨げ」、他方では見方をかへて「道德的抑制、惡德、及び窮困」に分類して居ること、周知の通りであるが、この一章の中には、實は極めて重要なる一節が含まれてゐるのである。それは併し、從來數知れぬマルサス解說者達が彼れの理論の骨子として繰り返へすを慣ひとした如き、かの謂ゆる三命題（本稿一四九―一五〇頁を見よ）の叙述を指すのではない。然らばその重要なる一節とは？

I　最終版第一編第二章より――

「何れの國に於ても、これ等の妨げの或るものは、多かれ少なかれ有力に、不斷に發動してゐる。だが併し、これ等の妨げが一般に普及してゐるにも拘らず尙ほ且つ、生存資料以上に增殖せんとする人口の不斷の努力（……增殖原理……）が存しないやうな國は滅多にない。此の不斷の努力が又不斷に、社會の下層階級者を困窮に陷し入れ、そして彼等の狀態の如何なる永久的大改善をも阻害しようとするのである。

「これ等の諸作用は、社會の現段階に於ては（……マルサスはすでに資本主義社會を見てゐる！……）、次の樣式で現

1) 6th ed. vol. i. pp. 523–524; cf. 2nd ed. p. 343.
2) 6th ed. vol. i. p. 525; cf. 2nd. ed. p. 344.

はれるものと思はれる。吾々は先づ、或る一國の生存資料が、その國の住民を安易に扶養し得べき分量と正に等しかつたと假定しよう（…第一次の均衡狀態…）。然るに、最も惡德なる社會に於てさへなほ發動すべき、かの人口（增殖）への不斷の努力は、生存資料が增加せらるゝ前に、この國の人民數を增加せしめる（…增殖原理による均衡の破壞…）。かうなれば、前に例へば一千百萬人を支へてゐた食物は、今や例へば一千百五十萬人の間に分配されなければならなくなる。その結果、貧民の生活は益々惡化し、彼等の多くは猛烈なる困厄裡に投げ込まれるに違ひない。勞働者の數も亦、すでに市場に於ける仕事との比例を超ねてゐるので、勞働の價格は必ずや低落するに至るべく、而かも糧食の價格はこれと同時に騰貴するに至るであらう。こゝに於てか勞働者は、前に得てゐたのと同額のものを稼ぐためには、より多くの仕事を爲さねばならない。この困厄期の間、結婚への失意と一家扶養の困難とが極めて大であり、從つて人口（增加）の進歩が阻害せられる（…人口の下降運動…）。さる程に、勞働の安價と勞働者の豐富と、更には彼等の間に於ける勤勉增加の必要とは、農民を刺戟して彼等の土地に、より多くの勞働を投ぜしめ、新たなる土壤を開墾せしめ、そして又既耕地を、より一層完全に施肥し且つ改良せしめ、かくてつひに生存資料は、人口に對して、吾々が最初出發した時期に於けると同一の比例、を有するに至らう（…均衡の回復…）。かうなると、又もや、勞働者の狀態が可なりに快適なものとなるので、人口（增殖）への抑制は或る程度、緩められて來る（…再び人口の上昇運動…第二次均衡破壞…）、さうして、短期間の後には、幸福に關する、此の同じ逆轉及び進轉運動（the retrograde and progressive movements, with respect to happiness）が、反復せられるのである。[1]」

マルサスはこの理論の大綱を、夙に第一版當時から把握してゐた。併し、むろん、强調しはしなかつた、――「人口原理」の何であるかさへ說明しなかつた彼れである。後版に於てもこの態度は、一見したところ、餘り變らない。しかし彼れは、これを明白に强調せると否とに拘らず、詳密丹念なる人類史的、社會史的探索と

1) 6th ed. vol. i. pp. 17—19; cf. 1st ed. pp. 29—31, (dotted and remarked in brackets by Minami).

いふ事實をもつてこれに答へる。即ち後版に於ける第一・二編の殆んど全部に跨る、かの長き歴史的記述編こそは、右に素描せられたるが如き彼れの理論の「驗證」に外ならなかつたのである。私はその中から、一つ二つを拾ひ來つて掲げよう。讀者は此の場合、右に譯出せる一文中の「幸福に關する逆轉及び進轉運動」といふ語が、次に於ては「繁榮と人口とに於ける擺動」ともなり、或は又「缺乏と豐富との間の擺動」とも呼ばれてゐることに、注意せらるべきであらう。

2　南洋オタヒート島 (Otaheite) に就いての「人口擺動」理論の一驗證——

「船長クック (Captain Cook) はこの島を訪れる度毎に、その狀態の變化を認めたが、これはその繁榮と人口と、に於ける著大なる擺動 (marked oscillations in its prosperity and population) があつたことを立證するものと思ふ。そしてこの事は正に、吾々は理論上、堆斷せざるを得ない所である。吾々は、これらの島々のどの人口も、過去久しきに亙つて一定數に停滯してゐたとか、或は又、それが、たとひ緩徐にもせよ一定の率で規則正しく增加しつゝあつたとか、考へることは出來ない。大きい波動 (fluctuations) が必ずや起つてゐたに相違ない。人口過多の時（……均衡の破壞時……）には、いつでも蠻人共の生來の好戰心を助長するであらう。そしてこの種の侵略に由つて釀成せらるゝ怨恨は、絶えず慘禍を擴大して、侵略をひき起した最初の事情が消え失せた後もなほ長く續いたに違ひない。以前から極度の節約をして生活し、その食物の限界にひどく押し迫つてゐた集密な人口に、一度か二度の凶作が起つて困難が襲ひかゝると、かゝる社會狀態のもとでは、殺兒と亂交[1]の、より甚だしき一般的流行をひき起すであらう。そして、これらの人口減退の原因は、右と同樣に、これらの原因を釀成した事情が終りを告げてからも、なほ暫くの間は、增大せる力をもつて作用し續けるであらう（……人口の逆轉運動……）。しかし事情の變化によつて徐々乍ら生じて來る或る程度の風習の變化は、

1) Note by Malthus omitted.

やがて人口を舊に回復するであらう（……均衡の回復……）、そしてこの人口は、最も極端なる暴力が加へられない限り、長きに亘つてその自然的水準以下に抑止せられてゐるやうなことはない（……新たなる均衡破壞の準備……）。」[1]

3

第一編第十四章の結論的一章句——

「人類社會のこの研究中に於て、今まで考察せる凡ゆる妨げは、明かに道德的抑制、惡德、及び窮困に歸着する。

「豫防的妨げの部類中、私が道德的抑制と名付けたものは、人口の自然力を抑壓するに幾分の參加をなしたことは確かであるけれども、これを嚴密な意味にとれば、他の妨げに比べて作用は微弱であつたことを認めなければならない。豫防的妨げの他の部類の中、惡德の項下に來たるものは、ローマ史の末期や、或る二三の國々に於て、その作用甚だ著大であつたやうではあるが、而かも全體として見れば、到底積極的妨げには及ばなかつた。從來、增殖力の大部分が發動せしめられたやうであるが、それから生ずる過剩部分は（……均衡の破壞……）、凶暴な原因で妨げられた。これらの中で、戰爭は最も重要な且つ顯著な形態であり、それに次ぐものは飢饉と凶暴な疾病とであつた（……均衡の回復……）。今まで考察した國々の大部分では、人口が、平均的且つ永久的生存資料に正確に一致したことは殆んどなく、兩極端の間を振動するのが一般であつたやうに思はれる。從つて欠乏と豐富との間の擺動（the oscillations between want and plenty）が、吾々が文明の進步してゐない諸民族の間に當然に期待するやうに、甚だ顯著に現はれてゐるのである。」[2]

かくの如くにしてマルサスは、人口と生存資料との間に於ける……均衡……均衡破壞……均衡回復……再びの均衡破壞……といふ理論の鏡に照らしながら、「普通の觀察には恐らく明瞭でない」ところの、——然り「吾々が有する人類の歷史が、一總じて、上層階級の歷史たるに過ぎなかつた」爲めにこそ、「最も注意深き觀察者に取つてさへ其の時期を測定すること困難なるべき、」[3]——「人類社會に於ける最も曖昧な、併し重要な若干點

1) 6th ed. vol. i. pp. 81—82; 2nd ed. p. 57.
2) 6th ed. vol. i. pp. 256—257; 2nd ed. pp. 180—181.
3) 6th ed. vol. i. p. 19; cf. 1st ed. pp. 31—32.

の解明[1]」を、彼れは試みようとしたのである。彼れの人口理論は、それ故にこそ、人口擺動を通じて見たる、人口の逆轉及び進轉運動を通じて見たる、人類社會の、一つの發展理論であり、同時に又それは、從來の史家が捨てゝ顧りみざりし人民大衆の、過去及び現在に亙れる、良かれ惡しかれ一つの社會史でもあつたのである。

マルサス人口理論の核心は、これを要するに、生存資料に依る人口の規制作用だけではなかつた。併し又、生存資料以上に出でんとする人口の不斷の增殖傾向だけでもなかつた。彼れの理論の頂點は、むしろ動態的、發展史的な、人口擺動の周期性に向つて突き立つてゐる。そして此の理論は、規制原理と增殖原理との、即ち一は横に他は縱に、一は均衡化的、他は均衡破壞化的に、相剋反撥の姿に於て働らき合ふところの、二つの原理を併せ有してゐるのである。

J・A・フィールドは、さすがに、マルサスに於ける此の擺動理論に注意した。そして云ふた、「人口成長に就いてのかゝる見解を採ることによつて、マルサスは彼れ自身の論理に囚はれてゐたやうに思はれる。擺動の觀念は、先づ最初、問題の一側面を考へ、而して次に他の側面を考へることから起つて來る。若しも兩側面が同時に考察せられたならば、これは what *does* happen ではなく、what *would* happen であることは明かである。妨げが作用するならば、それは人口を一定の限界内にひき抑へ、そしてこれらの擺動を阻止する[2]」と。かく云ふときフィールドは、若くして尊敬すべき業績を遺しながら、惜しむらくはマルサスを、マルサス理論

1) 6th ed. vol. i. p. 67; 2nd ed. p. 47 (not appeared in the 1st ed.).
2) J. A. Field, *Essays on Population and other Papers*, ed. by Hohman, Chicago 1931, p. 260 (italic original, dots of Minami).

の動態的、發展理論的性質を、遂に自から理解せざることを暴露して逝つたのである。

マルサスは屢々、「諸妨げ」の「恆常不斷の發動」"constant operation" or "constantly operating" を說いた。[1] これは彼れをして、ゴドウィン、コンドルセー等の平等主義思想を論破することを得せしめた。同時に彼れは、この「不斷の發動」を以て、自からをその諸先行者達から、特にウォレースから、コンドルセーから區別する一契機と目してゐた。[2] ——"Alas!" それは不幸にも、後代に於けるマルサス解說者への、一つの大きい躓きの石とはなつた。前揭フィールドの、的を失したる批判も、實はこの「妨げの不斷の發動」の「論理」に彼れ自から「囚はれた」に由來するのであるが、わが碩學キャナンを以てしても、なほ此の石は、彼れに取つてマルサス解釋上の蹉跌の基とはなつた。

キャナンは云ふた、「吾々が、一國が人口過剩であるといふ場合には、その國に於ける產業の生產性が、人口が然かく大きくなつてゐなかつたならばさうあつたであらう程、大きくはないといふことを意味する。即ち吾々は、人間が多過ぎるといふ觀念を許容するのである。これに反して、マルサスは彼れの時代の通說にひどく感染してゐたので、人間が多過ぎるといふ觀念は、彼れには全く無緣であつた。」何故か？「若しも人間が多過ぎるとすれば、人口の增加に對する妨げは、それが望ましい程强くはなかつた、即ち、妨げは無効であらねばならなかつた——あらざるを得なかつた筈である、」[3] と。私はこれに對していふ。キャナンの眼は此の場合にも——然り彼れは「人口の原理」を規制作用と解したのであつた——その同じ「規制原理」に昏惑せられた。

1) e. g. 6th ed. vol. i. pp. 4, 11, 17; 1st ed. pp. 14, 26, 29, & etc.
2) 6th ed. vol. ii. pp. 1—2, 7; cf. 1st ed. pp. 142—144, 152—153.
3) E. Cannan, *Theories of Production and Distribution*, 3rd ed. 1917, pp. 136—137 with notes (dotted by Minami).

彼れは此の原理を「増殖原理」との「不斷」の關聯に於て見るを得なかつた。云ひかへれば彼れは、マルサスの人口理論を、一つの動態理論として把握することが出來なかつたのである。マルサスの理論は、或る時期に於ける人口の溢剰を毫も拒否するものではなかつた。「溢剰人口はやがて掃蕩せられる、[1]」彼れの理論は冷然と然か云ふに過ぎない。

マルサスの人口理論は、確かに、一つの動態理論であつた。併しこの理論的性格は、かの「規制原理」と「増殖原理」との何れか一方を重視することに依り、若くは又單に一回的、從つて絶對的なものとしてのみ兩者の關聯を見ることに依つては、理解せられ難いであらう。マルサスに於ては、問題は單に、生存資料の現存量が人口増殖に限界を置く、といふことに盡きるのでもなく、さらばとて又、人口は常に内在力として既存の生存資料以上に増殖せんとする傾向を具へてゐる、といふことに蔽ひ盡くされ得るものでもなかつた。人口はこの「傾向」を、この「原理」を有することに由つて、不斷に生存資料の水準をその裏から衝撃し續け（＝人口壓迫）、時にはその上に乗り出でて（＝溢剰人口）やがて凶暴なる慘禍に依つて掃蕩されながら元の水準に復歸し（＝均衡回復）、時には又、生存資料範圍の擴大に向つての、ひとしく不斷なる人間の努力が奏効することに由つて、生存資料範圍の擴大と共に人口も亦――「或る甚だ有力且つ顯著なる妨げに依つて防止せられざる限り」――増殖しながら（＝人口の進轉運動）やがて生存資料の新たなる水準に落付き（＝均衡回復）、更には又、生存資料のおのづからなる縮少に餘儀なくせられて人口は後退しながら（＝逆轉運動）別の方向に

1) *An Essay*, 6th ed. vol. i. p. 525.

於ける生存資料の水準に落付き（＝均衡回復）、かくて人口は、絶えず周期的に、均衡と均衡攪亂との、進轉と逆轉との、相反する二面の運動を反復しながら成長する、……といふことに彼れの問題は全的に蔽はれたのである。マルサスの人口理論は動態的、發展的理論であつた、發展理念の上に立てる人口の周期的擺動の理論であつた、と解することの外に、より正しい解釋の道はあり得ない。――これが、本節に於て、從つて同時に本稿に於て、私の到達する最後の結末である。

六、結論と餘錄

能ふべくんば新たなるものをと志向しつゝも、なほ且つ、單に一つの解釋を目指したるに過ぎざる本稿に、改めての「結論」はない筈。論じ盡くさざる點には氣付くが、すでに餘白もない。私の到達せる諸結末を左に要約して結論に代へる。

第一、マルサスの謂ゆる「人口の原理」は人口の不斷の增殖傾向を指してゐた。第一版に於てはそれは甚だ不明瞭に、併し後版に於ては爭ひ難く明瞭に、現はれた。

第二、マルサスはこの人口の增殖傾向を、後版に於て「增殖の原理」と謂ひ慣はした。從つて「人口の原理」は、取りも直さず「增殖の原理」であつた。併し、

第三、マルサスに於ける「原理」は一つではなかつた。「增殖原理」の外に、それと並びて、或はそれ以前

に、今一つの原理があつた。私はそれを「規制原理」と假稱した。かくて、

第四、マルサスの人口理論は二つの「原理」から成り立つてゐた。「增殖原理」と「規制原理」。人口と生存資料との間に於て、後者は常に均衡化的に、前者は常に均衡破壞的に、働らき出でる。「妨げ」は均衡破壞時の所產である。かくて人口は、二つの相反する「原理」に支配されながら、增加と減退との、進轉と逆轉との、周期的擺動を反復する。而かもマルサスは生存資料範圍擴大への、人間の、ひとしく不斷なる努力を認識することによつて、人口の成長を、歷史に於ける發展の理念を、把握してゐた。マルサスの人口理論は、發展の理念の上に立てる人口の周期的擺動の理論であつた。

× × ×

マルサス逝きて滿一百年、而かも今猶ほ吾々は、マルサスの「人口原理」とは何か、マルサス人口理論の本體は何か、を問題としてゐる。想へば、學問進步の遲々たる、而して遼遠たる、洵に測り知られざるものがある。

人口論者マルサスを以て、「物理學に於てはニュートンに、病理學に於てはブラウンに、形而上學に於てはスピノーザに」（ヘーゲヴィッシュ）、或は又、理論經濟學に於ては「ケネーに、カール・マルクスに」（青年ブッヂエ）擬し讃えるの言葉は、これを罪なきマルサス遵奉者に任して置いてよい。だが然し！

「爭論は學問の生命なり。」（福田德三）――マルサスは身を以てその好箇の典範を示した。

「人口原理論は人口に關する凡ゆる近代的思索の出立點を成す。」（マーシャル）――マルサスは今猶ほ吾々の前に生ける存在である。

「彼れは意識せずして豐饒なる思想を播種した。」（フイールド）――マルサスは成心なき人類社會の探索者に酬ひるであらう。

「現代社會に於ける人民大衆の饑渇を説明し得るもの、そは社會主義者に非ずんば、マルサスである。」（後年のブッヂエ）――マルサスはそこに在る、社會問題は依然として吾々の前に在るから。

成心ある者、無視する者には、マルサスは無縁である。この一篇は、百年忌マルサスへではなく、眞實にマルサスを解せんと欲する人々に、捧げられてよい。そしてその人々に向つて私は、恐らくは犯したるべき幾多の誤解と曲解とを以て、「多くの反對論に、そして恐らくは、遙かに痛烈なる批判に、一門戸を開いた」（マルサス）筈である。

――一九三四年晩秋――